慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	役割取得の基本的条件としての同類感
Sub Title	A sense of sameness as a basal condition for role taking
Author	千田, 茂博(Senda, Shigehiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1982
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.22 (1982.) ,p.43- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000022-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

役割取得の基本的条件としての同類感

A Sense of Sameness as a Basal Condition for Role Taking

千　田　茂　博
Shigehiro Senda

Recently, role taking has received increasing attention as one of important factors in morality and prosocial behavior. Generally, role taking is recognized as a part of cognitive abilities, and researched in point of its development. In daily life, however, every person who has role taking ability doesn't always use his ability. What are important factors in regard of actual role taking is noteworthy point. In this article, the assumption that a sense of sameness is a basal condition for role taking in natural setting is discussed.

最近，新聞に中学生から罵声を浴びせかけられた老人の投書があったが，中学生たちは偶然出会った老人に対して，突然暴言を吐いて走り去っていったというのである。これに類似した例は今日増加しつつあると思われるが，こうしたことは単に敬老精神がみられなくなったといった問題ではなく，むしろ相手の立場に立って考えることができなくなってきていることを示しているのではないだろうか。「相手の立場に立つ」ということは様々な人間関係において非常に重要なものであるが，心理学においては，役割取得 (role taking) と呼ばれ，道徳性や向社会的行動を規定する要因として注目されてきている。ここではまず，役割取得の研究を概観してみたい。

役割取得の諸研究から

役割取得は自他の観点の違いを意識し，他者の観点に立つことにより，他者の欲求，思考，感情，知覚などの内的特性を推論することであると考えられている。

役割取得の実験研究は様々な課題を用いて行なわれているが，内容的に大別すると次の3つに分けられる。

a）他者からの見えの推論
b）他者の思考の推論
c）他者の感情の推論

他者からの見えの推論としては，Piaget ら (1967) の3つ山問題が代表的なものとしてあげられる。これは大きさなどの異なった3つの模型の山を配置した箱庭を用意して，子どもをその箱庭のまわりの1ヵ所に座らせたままで，箱庭のまわりをまわる人形から見るとその3つの山がどのように並んで見えるかを子どもに推論させるといった課題である。

他者の思考を推論する課題としてここでは Flavell らのもの (1968) をあげておく。この課題では5セントと書かれた箱と10セントと書かれた箱が用意され，それぞれに5セントニッケル貨と10セント銀貨を入れておく。子どもはもう1人の子どもとゲームをしてもらうと言われる。そのゲームとは，一方の子がどちらかの箱の中のお金を取り除いておき，相手の子は1つの箱を選択してその中にお金がはいっていればそれをもらえるという簡単なものである。被験者はお金を取り除く側になるのだが，その時に相手の子にお金をとられないようにするにはどうしたらよいかという質問をされる。ここで，被験者が相手の考えをどこまで推論できるかを調べるのである。

他者の感情の推論の例としては，Borke の課題(1971)がある。ここでは子どもが「うれしい」「悲しい」とい

った感情とそれらに対応する表情図を見分けられるかどうかを確かめた上で，「おもちゃをなくしてしまったところ」とか「子どもが他の子どもにお菓子をあげているところ」といった様々な場面の絵を見せて物語を聞かせるのである。絵のなかの登場人物の顔はブランクになっていて，子どもはその人物の感情を推論してそれに合った表情図を選択するように教示されるのである。

このように役割取得の内容によって様々な課題が用いられているのだが，実は同じ内容領域においてもいくつかの異なった課題が用いられており，研究結果は必ずしも一致していない。研究者間で役割取得をどうとらえるかが一致しておらず，そのために用いる課題も異なっている。たとえば，先の Borke の研究に対して Chandler と Greenspan (1972) は真に役割取得を扱っていないと反論した。彼らは役割取得とは，単にある状況でその人がどういった感情を持つかを推論することではなく，他者の感情が自分のものと異なっている時にでもそれを推論できることであると考え，Borke の手続きにさらに新しい手続きを加えた研究を行なった。つまり，Borke の課題のなかに，途中から第2の人物を登場させて，その限られた情報しか持たない人物の立場に立てるかどうかをみたのである。その結果，主人公の感情の推論では Borke の結果と一致したが，第2の人物の立場に立った推論はより高い年齢にならなければ不可能なことが示されたのである。

このように役割取得のとらえ方が研究者間で一致しておらず，各課題間の相関研究もなされてはいるが，一貫した関係は見いだされていない。

役割取得の研究はこのように混沌とした状況であり，体系化されるためにはかなりの時間が必要だろうと思われる。こうした現状に関しては，Kurdek (1978)，木下 (1977) らの論文で詳細に論じられている。

役割取得への志向性

このように役割取得の研究では様々な課題が用いられており，課題を達成できる年齢は各課題によって異なっている。しかし，少なくとも14，15歳ぐらいまでにはほとんどの課題が達成可能になっている。ところで実際の日常場面では14，15歳頃になれば，役割取得行動といえるものを現実に行なうかといえば，残念ながら最初にあげた中学生の例をみても，現実にはそうとはいえないのである。

Flavell (1974) は役割取得のコンポーネントを4つに分けて考えている。

A）存　在：(existence)　ある場面で他者がある心理的状態をもつであろうということに気づくこと

B）必　要：(need)　そこで，他者の心理的特性について推論することが必要だということに気づくこと

C）推　論：(inference)　他者の心理的特性について推論すること

D）応　用：(application)　推論によって得た他者についての新たな考えをもとに行動すること

日常場面で役割取得が適切に行なわれていないのは「推論」の困難さによるのだろうか。確かに相手の立場に立って考えることは非常に困難なことであり，かなりの認知的能力が必要な場合もあろう。しかし，先の中学生の例のように「推論」自体はそれほど困難ではない場合も多いのではないだろうか。おそらくこの中学生たちも自分たちの暴言を聞いて老人がどう感じたと思うかと質問されれば，老人の気持ちを推測できるだろうと思われる。むしろ彼らに欠けていたのは相手の立場に立つ「必要」に気づくことだったのではないだろうか。これまでの役割取得の研究は「推論」的認知能力がどのように発達してくるのかという点にのみ関心が向けられてきており，各課題でははじめから相手の立場に立って考えるように指示されている。もちろんこうした場面でどこまで相手の立場に立って考えられるかという認知的能力の発達の研究も重要であることは理解できるが，日常場面での役割取得に関しては，「必要」，つまり相手の立場に立って考えようとする志向性の問題も非常に重要なものである。しかし，残念ながらこうした自発的な役割取得に関する研究はほとんどなされていないのである。小論ではこの志向性の問題に焦点をあててゆきたい。

この志向性に関してはおそらく大きな個人差，また場面による違いがあると考えられる。この役割取得の志向性を規定している要因は何だろうか。

たとえば，両親などまわりの人が相手の立場に立って考えるという行動をどの程度示してきたか，つまりそうしたモデルが個人のまわりに存在したかとか，自分自身が役割取得を行なった場合にどのようなフィードバックが与えられてきたのか，といったその個人の生育環境も重要な要因となるであろうし，また役割取得が必要と考えられる場面で実際に相手の立場に立って考えるだけの心理的ゆとりといったものがあるかどうかも問題となるだろう。他にも様々な要因が考えられようが，私はここで根本的に役割取得への志向性を規定する要因として

「同類感」というものを考えてみたい。この「同類感」とは「同じ人間なんだ」という意識のことである。つまり，役割取得を実際に行なうには相手を「同じ人間なんだ」と感じることが前提条件として必ず必要なのである。おそらく「同じ人間なんだ」といったことは当然のことであり，誰でもわかっているという反論があるかもしれない。しかし果して本当にそうであろうか。確かに誰でも頭ではわかっているといえるかもしれない。しかし，目の前にいる相手を「同じ人間なんだ」と実感するということはその人を人格をもった個人として尊重するということではないだろうか。ところが実際にすべての人に対して人格を尊重してゆくというのは非常に困難なことである。たとえば，突然目の前で刃物を振りまわし始めた男に対して同じ人間なんだと感じられるだろうか。地下鉄の駅の通路で薄汚れた服を着て寝ている人に対して同類感をもてるだろうか。小さな子どもに対していつもその子の人格を尊重しているだろうか。こう考えると実際にすべての人に実感としての同類感をもつということが実はかなり困難であることを理解していただけるのでないだろうか。もちろん「あの人も同じ人間だと思いますか」と質問されれば，ほとんどの人が「当然です」と答えるであろうが。

この「同じ人間なんだ」という同類感は，仲間意識とか，その人が知り合いかどうか，好意をもっているかどうかといったこととは違った次元の問題である。こうしたことも確かに役割取得に影響を与えるかもしれないが，仲間意識がなければ役割取得は生じないとは言えない。しかし，相手に対して同類感をもたなければ，もともとそこで相手の立場に立って考えようなどという気にさえなり得ないのではないだろうか。

役割取得は，相手が自分とは違った考え，欲求，価置観などをもっているという認識が前提となっているが，同類感はその前提と矛盾しているように聞こえるかもしれない。しかし，同類感が同じ人間なんだと感じ，相手の人格を尊重することであるからには，その人の個性，自分とは違った考え，欲求，価値感などをもっていることも当然認めるはずである。

ある個人がどの程度の範囲の人に対して同類感をもっているかを正確に知ることは難しいが，おそらくかなりの個人差があると考えられる。極端にいえば，自分自身にしか同類感を感じない人もいるかもしれないし，逆にマザーテレサのようにすべての人に同類感を感じられる人も存在するかもしれない。また同類感は同じ人間なんだという意識であると定義したが，なかには動物に対してさえ同類感をもっている人もいるかもしれない。飼っているペットを家族の一員として人間と同様に扱い，あたかも会話ができるかのように話しかけている人もいる。野生動物にさえ同類感を感じている人も存在するであろう。あるいは植物に対してさえ同じ生きものとして同類感を抱く人もいるかもしれない。同類感は無限に広がる可能性をもっているのである。しかし，この同類感は頭で考えられたものでなく，あくまでも実感としてとらえられたものでなければならない。

役割取得と同類感

役割取得が現実に行なわれていない典型的な例としては，人種差別，障害者に対する偏見といった差別の問題があげられる。

日本人は同一民族であり，あまり人種差別を意識しないように思われるが，実は韓国の人々との問題や，人種とは少し異なってはいるが同和問題などが根深く残っている。ナチのユダヤ人虐殺やアメリカの黒人問題などはまさに人種差別の典型である。

しかし，それではたとえばアメリカの白人たちが相手の立場に立って考えるための認知的能力が他の人々よりも劣っているのだろうか。もちろんそうとは考えられない。むしろ Kohlberg (1971) によれば，アメリカは他の文化よりも高い道徳性の発達を示しているのである。

ところが黒人の問題に関してはまるで人が変ったかのようになり，黒人の立場をまったく理解しない人が多い。先年ヨーロッパ旅行中に同じツアーに参加していた南アフリカ共和国の白人は紳士的な人物であったが，やはり同じツアーに参加していた黒人に対してだけはまったく口を聞かず，食事で同じテーブルについた時でさえ完全にその黒人たちを無視し続けたのである。こうした黒人に対する役割取得の欠如はまさに黒人に対する同類感の欠如によるのではないだろうか。もちろんすべての白人がそうだとはいえないが，多くのアメリカの白人にとって黒人は同じ人間だとは感じられないのであり，そこでは黒人の立場に立って考えようとする態度など生じてくるはずもないのである。いくら表面的に差別撤廃，平等が唱られたとしても基本的に同類感がもてなければ，問題は解決しないのではないだろうか。

戦争状態になった国の間ではお互いに相手国の立場などはまったく理解しないのであるが，やはりこれも同類感の欠如によるのではないだろうか。むしろ政府は敵に同類感をもたないように国民を操作しようとする。たとえば，第2次世界大戦の時，日本が「鬼畜米英」と言っ

たようにである。そうすることにより傷ついた敵兵や戦闘能力のない女，子どもまでも平気で虐殺してしまうことが可能になるのである。もちろん敵国の人間に対して同類感を感じ続ける人もいようが，そうした人たちは逆に敵兵を殺傷することに罪悪感を感じてコンフリクト状態に陥ってしまうのではないだろうか。

男女差別の問題もやはり役割取得の欠如である。男性側の一方的な考え方ですべてが決められ，女性の立場がまったく考慮されなかったのである。そんなことはない，女性の立場を考慮したからこそそうした役割取得が行なわれたのだという反論があるかもしれない。しかし，それは偽りの役割取得である。むしろ，はじめから男と女は違うんだという意識から出たものであり，真に女性の立場に立って考えられたものではない。確かに生物学的な性差が存在することは事実ではあるが，女性に要求されている女らしさはそれ以上のものである。そこにはまさに同類感が欠如しているのである。男性の女性に対する表面的なやさしさ，いたわりといったものも，実は同類感に基づかない偽りの役割取得ではないだろうか。近年，女性解放運動が高まり，徐々に女性に対する偏見は少なくなってきてはいるが，男も女も同じ人間なんだという実感をすべての人がもたなければ，真の解決にはならないだろう。

障害者に対してもやはり役割取得は行なわれてこなかった。過去の歴史はいかに障害者が立場を無視され，非人間的に扱われてきたかを明白に示している。現在でも多くの障害者は病院，施設などに隔離され続けている。そのほうが彼らにとってもいいのだと社会から隔離することが正当化されているが，ここでもやはり彼らの立場からはまったく考えられていないのである。彼らに対する同情とか憐みといったものも実は彼らの立場に立って考えられたものではなく，むしろ外側から彼らを見ているところから生じたものではないだろうか。障害をもった人々からよく聞くのは「同情の目でみられたくない，普通の人と同じように対応してほしい，みんなと一緒に生活してゆきたい」といった言葉である。こうした障害者に対する差別もやはり同類感が欠如しているからではないだろうか。今年は国際障害者年ということで，様々な行事，活動が行なわれているが，真に同類感に基づいた上での障害者の立場に立って考えられている活動であるかどうか再検討されなければならない。

ここまで人種差別，障害者差別といった大きな問題を取り上げてきたが，より日常的な場面においても，役割取得が現実には行なわれていない場合がある。特に最近は，おもいやりが失なわれつつあるとよく言われている。冒頭であげた中学生の例もその1つであろう。電車やバスの中で老人が立っていても席を譲らない人が増えているし，混んだ車内でも平気で足を組んで座っていたり，大きなバッグを肩にかけたままで立っていて，まわりの人が通りにくくなっているのも気にしないといった人もいる。所構わず空き缶やタバコの吸い殻を投げ捨てる。深夜になっても近所迷惑も考えずにステレオを大きな音量でかける。こうした問題はやはり相手の立場に立って考えていないために生じるのであろう。老人が揺れる車内で立っていることの辛さ，タバコの吸い殻を片付ける人の大変さ，騒音で寝られない人の苛立つ気持ち，こうした相手の気持ちが感じられれば，そうした行動はできなくなるのが普通である。もちろんなかには相手の気持ちをわかっていてもそんなことは気にもしないでそうした行動を続けるという人もいるのかもしれないが，ここではその点については言及しない。

しかし，だからといって彼らが相手の気持ちを「推論」するだけの認知的能力が欠けているのかというと，そうとは考えられない。相手の気持ちを尋ねられれば，おそらく「推論」できるのである。むしろ問題は彼らが自発的に役割取得を行なわないことである。そして，その原因はやはり同類感の問題であると思われる。

現代社会においては，生活の機械化，都市化の傾向によって人と人とのかかわりあいは減少し，非人間的なものになってきている。隣の住人の顔さえ知らない，あいさつ以外の言葉を交したこともない，近所の子どもが危険なことをしていても注意もしないといった状況が増えている。都会の雑踏や，満員電車の中での他人は，自分にとって障害物としか感じられないといった傾向が強くなってきている。まわりの人間に対する同類感が失われつつある。少なくとも同類感が非常に希薄化していることは事実である。同じ人間なんだという意識をもてなくなった他者に対して自発的な役割取得は行なわれない。隣の住人の存在を実感として感じなければ，ステレオの音が気になるだろうかと考えようとさえしないだろうし，掃除をする人に対して同じ人間なんだという実感がなければ，感謝の気持ちも生じない。電車の中の他人が障害物でしかなければ，その障害物の気持ちなど考える必要もないのである。

現在はまだそこまで極端な例は少数であろうが，今後こうした傾向はより強くなっていくのではないだろうか。何らかの歯止めが必要なのである。

ボランティア活動における同類感

もともと私がこうした同類感について考え始めたのは，自閉傾向児のグループ活動にボランティアとして参加した体験からであった。既に述べてきたように，障害児，問題児といわれている子どもたちと接する場合においても，役割取得は非常に重要なものである。しかし，現実には，彼らの問題は外側から観察され，考えられている場合が多い。彼らの立場に立って問題を考えてゆくためには，彼らも同じ人間なんだということを実感していなければならないのである。

私はそのグループ活動で初めて障害児といわれている子どもたちと接したのであるが，最初のうちは，彼らにどう接していけばよいのかわからず，自分が担当した子どもの後をただ追いかけているだけであった。その子どもは言葉を話すことはできたが，こちらの話しかけにはなかなか反応してくれなかった。しかし，毎週1回，2時間ほどのグループ活動ではあったが徐々に子どももこちらを意識してくれるようになってきたのである。そんなある日，1つの事件がおきた。その日私はグループの子どもたちのためにおやつを買いに行く役割を私が担当していた子にやらせようと考え，彼を誘ったのであるが，彼は頑として応じない。しばらく押し問答を続けていると，彼が「来週行く」と言ったのである。私は半信半疑ではあったが，その日はとても行きそうになかったため，来週必ず行くという約束をしてその日はそれで終ったのである。さて次の週になり，彼がどうするだろうと待っていると，彼はグループにやってくるなり，「おやつ買いに行く」と楽しそうに出かけたのであった。その時は私も彼が約束を守ってくれたという驚きとうれしさでいっぱいだったが，後になって考えてみると，それまで自分がいかに彼の気持ちを無視してこちらの都合で彼を動かそうとしていたかということに気づいて愕然としてしまったのである。もちろん頭では彼の立場に立って考えなければいけないということを理解しているつもりであったが，実際には心のどこかで自分とは違った人間なんだという意識を捨て切れていなかったのである。こういった体験を通じて初めて彼らも自分と同じ人間なんだということが実感として理解できたと思っている。そして初めて彼らの立場に立って考えられるようになってきたのではないだろうか。もちろん完全に彼らになりきることはできないけれども。

こうした体験は実は多くのボランティアに共通しているものである。このグループに参加したボランティアたちの体験や意識の調査（千田，1979）のなかでも，多くのボランティアが，「障害者や障害児に対して，異常なもの，自分たちとは異なったものといった構えや偏見がなくなった」，「普通の子と変らない，同じ人間なんだと実感するようになった」，「以前から頭ではわかっているつもりであったが，実際に接してみて初めて実感としてわかった」などと答えている。そして「こうした障害者の側に立って考えるようになった」，「彼らも社会のなかでみんなと一緒に生活できるし，そうしていかなければならないと考えるようになった」というボランティアもいた。ここでボランティアの1人が書いた文章を引用してみる。

「……〝自閉症〟ということば，君も聞いたことがあると思います。最近よく聞くし，また使われもしていますから。僕は，昨年から，週1回ですが，いわゆる〝自閉症〟と名付けられた子供と接する機会に恵まれました。

でも，〝自閉症〟って一体何だろう？どんな子供のことを言うのか。僕には今だにわからない。

学者というのは，因果なものですね。ちょっと変わった子供がいる。そんな子供をみると，あの〝知的好奇心〟というやつで，近づいていき，冷徹な目で，観察し，分析する。次がレッテル付け――こんな症状を示す子供たちをまとめて〝自閉症児〟と名付けよう――と。そして，次は……。残念ながら，〝知的好奇心〟とやらは，そこで消えてしまうことが多いのです。

僕が今，かかわっているヤッちゃんもそんな子供のひとり。小学校2年生。元気のいい子です。トランポリンとか自転車が好きで，始終動きまわっています。最近やっと，一緒に遊んでもらえるようになったところです。

つい先日でした。彼と初めて近くの江戸川べりに行ってみました。川は濁っていたし，風も強かった。しかし川面には赤い陽がきらきらと輝いていたし，川向こうに見える銀白色の鉄橋を，彼の好きな電車が渡っていくところだった。そのとき，ふと彼がもらしたのは『ウツクシイシゼン，ウツクシイシゼン』ということばでした。一瞬僕はハッとしました。なぜなら，ふだん彼の口から出ることばと言えば，テレビコマーシャルに出てくる単語の繰り返しか，具体的な要求を示す単語の羅列がほとんどだったからです。そして川べりの砂の上に小枝で一生懸命に字を書きはじめたので

す。あいうえお，かきくけこ，……まみむめも，そこまで一気に書いたあと，少しためらってから『うみ』とゆっくり大きな字を書きました。『海？』と僕が問いかけると『ウツクシイシゼン，ウツクシイシゼン』と僕の目をみつめながらうれしそうに何度も繰り返していました。

その時の僕の気持ち，とてもうまく表現できない。ただ無性に彼がいとおしく思えたし，彼との見えないカベが一気にふっ切れた気持ちだったとだけ書いておきます。

同時に『人間みんなチョボチョボヤ』という君のことばと顔が自然に浮かんできました。君の言っていたことが，僕にも実感できた。そんな気持ちでした。何て感傷的なんだ，もっとクールな観察者の目をもっていないのか，という声もどこからか聞こえてきそうです。でも僕は君と同じように実感というやつを大切にしたい。」

子どもとのかかわりを通して，同類感を実感してゆく過程が印象的に語られている。「人間みんなチョボチョボや」という言葉のなかにある「みんな同じ人間なんだ」という意識がはっきりと感じられる。ボランティアたちはこうした子どもとの共体験を通じて同類感を感じ，初めてこどもの立場に立って考えられるようになってゆくのである。

同類感の形成

これまで種々の例で述べてきたように同類感は役割取得の基本的条件として非常に重要なものであるが，それではこの同類感はどのように形成されるのだろうか。

同類感自体が頭で理解するものではなく，実感として感じるものであるということは，その形成もやはり知的レベルでは困難である。たとえば，「人間はみな兄弟」と繰り返してみても，実感としてはなかなか感じられないものである。

同類感が体験によって形成され得ることは，ボランティア体験の例をみても明らかである。しかし，この体験とはただ一緒にいさえすればよいというものではない。ヨーロッパ旅行中の南アフリカ共和国の白人の例は，一緒にいても何の変化も生じない場合もあり得ることを示している。ただ一緒にいるだけではなく，共に何かを体験し，それを共有するという「共体験」というべきものでなければならないのである。先に引用したボランティアの体験はまさにその「共体験」であり，彼の言葉を借りれば「彼との見えないカベが一気にふっ切れた気持ち」になり，同じ人間なんだという同類感を実感できるのである。

ただ，先ほどの白人にしても，たとえまったく話はしなくても一緒にいさえすれば，何かのきっかけで共体験をもつ可能性がまったくないとは言えない。その意味では，単なる物理的接近といえども，完全な隔離よりはましであろう。黒人と白人とが，学校から公衆トイレに至るまで別々のものを使用するよりは，同じ空間で生活しているほうが，共体験が生じる可能性は高まり，同類感が形成されやすくなろう。障害者も社会のなかで一緒に生活してゆくことで一般の人々と体験を共有できるのである。近年，障害児を養護学校とか特殊学級に入れて分離教育をするのではなく，普通学級でみんなと一緒に教育を受けるべきだという統合教育が提唱されてきている。これは単に障害児にとってのみ意味があるわけではなく，一般の子どもたちにとってこそ障害児との共体験を可能にし，同じ人間なんだという同類感の形成，さらに自発的に相手の立場に立って考えることを学ぶといった大きな意味をもっているのである。こうした統合教育を実践してきた先生方から「子どもたちがおもいやりをもって人に接するようになった」といった報告がよく聞かれるが，まさにこのことを実証しているのではないだろうか。

様々な人々との共体験を通じて，個人のもつ同類感は拡大してゆくのであろう。そうした共体験の機会を増やすことがまず必要なのである。

結　　語

以上のように日常場面における役割取得は単に認知的な役割取得能力の有無によってのみ規定されるものではなく，その意味で，現在の役割取得の研究は片手落ちであると言わなければならない。確かに役割取得能力の発達，それを支える基本的な認知能力も明らかにされる必要があるが，それだけでは不十分である。

現在の役割取得の研究の多くは，先に示したような課題を用いた実験室的研究であり，被験者にはじめから相手の立場に立つように指示しているが，この方法では自発的な役割取得に関しては研究できない。また，被験者と役割取得される対象との関係についても考慮されていないが，現実にはその関係によって役割取得するかどうかが変化するのである。こうした要因はむしろデータの防害要因としてコントロールされているのかもしれないが，役割取得の研究が日常場面で有効性をもつためには

これらの要因の分析が必要なのである。また，自発的な役割取得に関しては文化による違いも考慮されなければならないだろう。現在の役割取得の研究はこのような問題点を残しており，今後再検討されなければならない。

この論文ではこうした自発的な役割取得を規定している基本的条件として「同類感」というものを仮定し，考察してきたが，まだまだ仮説的なものでしかなく，また他にも多くの要因が考えられる。今後はこうした要因の分析のための，より日常場面に近い状況での自発的な役割取得の研究が必要であろう。

文　　献

Borke, H. Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy? Developmental Psychol., 1971, 5, 263-269.

Chandler, M. J. & Greenspan, S. Ersartz egocentrism: A reply to H. Borke. Developmental Psychol., 1972, 7, 104-106.

Flavell, J. H., Botkin, P. T., Fry, C. L., Wright, J. W. & Jarvis, P. E. The development of role-taking and communication skills in children. New York: Wiley, 1968.

Flavell, J. H. The development of inference about others. In Mischel, T. (ed) Understanding other persons. Basil: Blackwell, 1974.

木下芳子　役割取得能力の発達　児童心理 1977, 1779-1800, 1973-1999.

Kohlberg, L. From is to ought: How to commit the naturalistic fallacy and get with it in the study of moral development. in Mischel, T. (ed.) Cognitive development and epistemology. New York: Academic Press, 1971.

Kurdek, L. A. Perspective taking as the cognitive basis of children's moral development: A review of the literature. Merrill-Palmer Quarterly, 1978, 24, 3-28.

Piaget, J. & Inhelder, B. The child conception of space. New York: Norton, 1967.

千田茂博　自閉傾向児のグループセラピィに参加したボランティアの体験と意識　慶大大学院社会学研究科修士論文 1979.